



数量  
限定

## 漱石羊羹

漱石の好んだ  
ピーナッツと紅茶。  
二つの味を漱石の  
好物だった羊羹に。



販売価格: 1,450円

販売場所: 三越・藤崎、エスパル、  
仙台駅おみやげ処1号店、一部  
直営店(駅前店・一番町店・中央店・  
晚翠通店・大学病院前店)

紅茶

ピーナッツ  
落花生

## さくら餡のどら焼

「春」を感じるどら焼  
1個 118円

漱石生誕150年

# 仙台と夏目漱石

漱石の蔵書のほとんどは  
東北大図書館にある

※資料A,B  
『吾輩は猫である』初版本  
下編表紙絵  
【明治40年(1907)】

## 漱石、猫に出会って運が開けるの巻

漱石センセイを巡る物語 一その③一

鏡子夫人の回想によると、漱石の家に野良猫が住みついたのは、明治37(1904年)の夏のはじめのこと。『吾輩は猫である』を書き始めたのはその直後です。生まれてからもたたない仔猫が家の中に入ってきて、猫嫌いの夫人は外へつまみ出すのですが、いくらつまみ出しても、いつの間にかまた家の中に上がってくるので、誰かに頼んで遠くに捨ててもらおうと思っていたところ、漱石が置いてやったらいいと許可したというのです。

この辺のやりとりは、『吾輩は猫である』にもしっかり描写されています。

「吾輩が最後につまみだされようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといながら出てきた。(中略)主人は鼻の下の黒い毛をひねりながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんならうちへ置いてやれといったまま奥に入ってしまった」(第1章より)

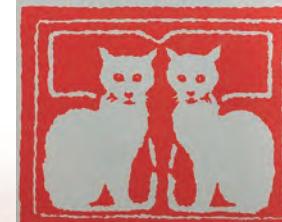
その後、よく家に入りしていたおばあさんに、「奥様、この猫は全身足の爪まで黒うございますが、これは珍しい福猫でございますよ。飼っておおきになるときっとお家が繁盛いたします」と言われたそうです。この猫をモデルに書き上げた『吾輩は猫である』が好評をもって迎えられ、漱石は小説家としての名声を得るのですから、まさに福猫だったわけですね。

かといって漱石は、特別に可愛がるでもなかったようで、『吾輩は猫である』でも次のように書いていますし、夫人も実際そうであったと証言しています。

「吾輩がこの家に住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望(人気がない)であった。(中略)吾輩は仕方がないから、出来る限り吾輩を入れてくれた主人のそばにいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これは

夏目漱石  
【慶應3年(1867)  
~大正5年(1916)】

資料C  
『吾輩は猫である』初版本  
上編表紙【明治38年(1905)】



資料C



好奇心から飲み残しのビールで  
酔釘し、水を貯めた力メに転落。  
這い上がるうつともがくも、諦めて  
「南無阿弥陀仏。有難い。」と  
いいながら最期を迎える猫の  
挿絵(資料A,B)

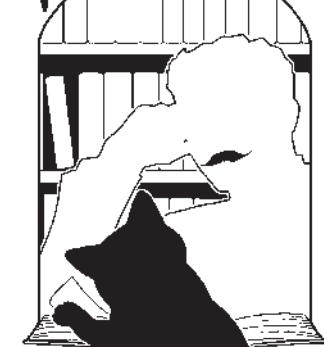
あながち主人が好きという訳ではないが、別に構い  
手がなかったからやむを得んのである」(第1章より)

小説の中の猫は、連載最終回(ホトギス明治39年8月  
号)でビールをたらふく飲んだあげくに、大きな甕(かめ)に落ちて死んでしまいます。一方、実際の猫はその後も生きのびていましたが、明治41(1908年)9月13日に病死してしまいました。漱石は親しい友人に猫の死亡通知のハガキを出して、葬儀は行わないといわざわざ伝えています。そして自宅の裏庭に埋葬して、この日を初代の猫の命日としています。

その後漱石は、三代目まで猫を飼っていたのですが、猫派であったかというとそうでもなく、犬に対しても同様であったようです。その話はまたの機会に。

【文. 米澤誠(東北大附属図書館)】

## 漱石文庫



### 漱石文庫 公式ロゴマーク

夏目漱石没後100年・生誕150年を  
記念して、東北大附属図書館が  
制作したロゴマークです。  
デザインは、漱石を主人公とした  
『先生と僕』4巻(芳文社)などの作品  
がある漫画家・香日ゆら氏で、カイザル  
ひげの漱石と一緒に本をめくるネコの  
シルエットとなっています。

**君菓**  
**白松がモナカ**  
**白松がヨーカン**

本社 仙台市青葉区大町二丁目8番23号 ☎ 022 (222) 8940  
fax 0120-008-940  
<http://www.monaka.jp/>